

汲古一心 「寸感」

展覧会の功罪ということがよくいわれる。展覧会というものはそんなに多くなつて、書道も大展覧会、個展、社中展と、東京ではほとんど年間毎日どこかで何かをやっているといえるくらいである。したがつて書を学ぶ人々の中に、会場芸術を目標としたものが多くなつて、深く己れのために掘り下げたものが少なくなつたといつて、展覧会を批判している向きもある。そしてこれはたしかに一理あることも事実ではある。

しかし私はむかしの人々も、書をかき時、不特定の多数の人々に見てもらふことを希求し、あるいはその想定の上で作品を作り、永い時間の批評にたえる立派なものをと念願していたであらうと思ふ。そのことの窺える事例は非常に多く、碑、扁額のような多くの眼にふれやすい作品を書くことが喜ばれ、また尊重されたことも、会席を旗亭に設けてその近作を陳列し、来館者に酒食を饗して席上揮毫したことなどの多かつたのも、実に創作欲に伴う発表本能といったようなものの当然の結果ではなかつたかと思ふのである。

それが現代の文化活動を尊重する機運にあつて、常設の展覧会場が大小無数にでき、簡易に団体あるいは個人で随時展覧会を開いて、大衆の鑑賞に供することができるようになったことになり、作家の側からは発表の適当な機会と場所が与えられたことになり、鑑賞者の側からは作者の最も努力した作品を数種類または一括して自由鑑賞する多くの機会を供せられたことになり、相互に幅広い鑑識眼を養われるために、作家も見つる方も向上して、高度のものへと進展して、新しい良いものが作られてくるのではあるまいか。

ただこの会場での鑑賞効果を期待するあまりに、ある偏した技術だけが進歩したり、また個性を忘れた時流のひとつの型に捉われ過

「昨夜一聲雁」昭和三十六年

ぎたりして、自分を掘り上げて深い立派なものを作るよりも、時の評判に左右されて自己不在の流行やあるいは奇抜なものだけが、さも近代芸術であるかのような錯覚に陥ることもないではない。がしかし、その弊による損失を差し引いてもなお展覧会による啓蒙の利益の方に、随分大きいものがあると思ふ。

この近代芸術の発展に見逃せない大きな力となつてゐる展覧会を無視して、自己満足だけのために芸術することも悪いことではないかも知れないが、よほどの天才でないか幅の広い栄養を見出し、これを掘りそこなうおそれがある。要は出品作家の心構えのいかんにかかわることではなからうか。

私は各大学の学生諸君が、多忙な研究の余暇を、教養として趣味として研究として、この墨の芸術を探求され、その成果をある時期において一場に食示して、相互に鑑賞し批判して、同じ道にあるものだけが知る喜び苦しみを悟つて、提携、錬磨の道場としてゐる姿に、願う賛意を表し大きな期待をもつてゐるものである。

今次の上野の文化会館という第一級の会場を獲得して、豪華な書展を行つたのを見て、その活発なる活動に舌を巻いてしまつたが、ただ率直にいえば、企画に慮るだけの若い意欲をぶつつけた迫力のある作品が少なすぎたようである。若くて体力もあり、意欲もすばらしい筈の人々にしては、ややまとまり過ぎて漲るものが足りないことが惜しいと思つた。

人間の最も基本的なものを決定する時期の人々の集まりであると思つと、もつと大らかにそして幅広い視野に立つて作品されることを切望してやまない。これは熱意を傾けて運営をされた役員諸君と、あのすばらしい会場とを見て、私の慾も少々過分にふくらみ過ぎたことも事実ではあるが。

終わりに室田委員長が何度も足を運ばれたので、ご所定のままに短冊、硯などを少しばかりが清覧に供したが、書道の世界にある筆紙硯墨についても新しい眼で骨董的に陥らない用途を第一目標とした研究を展開されるよう、切に望んでやまない次第である。妄言多謝。

「乾惕」、昭和三十八年

「筆間雜記」中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。